

明らかになった。

②予備調査として、日本モンキーセンターで飼育されている6科26属73種(2亜種を含む)にロープと積木を投入、対象操作の行動リストを作成した。操作に含まれる運動型と使用身体部位をもとに506の行動型が識別された。さらに運動型をもとにこれらが22の上位カテゴリーに分類された。そのうちマカク属に21のカテゴリーが出現した。特にニホンザルで頻繁に報告されている「こする」「なでる」「ころがす」はオナガザル科のグエノン、マンガベイ、ヒビに、新世界ザルのオマキザルにも観察された。使用身体部位に関しては、大型類人猿と並び指先を使用した行動型がマカク属に多く出現した。さらにFoodenのマカク属の系統的分類及び生息環境や食性等生態的資料をもとにマカク属の種間で見られた類似性や差異を検討し、対象操作の進化的規定図の究明を試みた。

課 題 7

ニホンザル体毛の地域差についての研究

稲垣晴久(日本モンキーセンター)

ニホンザル体毛の地域差を明らかにすることは、温暖な気候から寒冷な気候にまで生息域を拡げた、ニホンザルという種の特性を知る上で重要である。

また、体毛が保温という機能を果していることから、哺乳類一般の寒冷地への適応を考察する上でも、興味あるところである。

報告者は、下北・波勝崎・宮島の各地域に生息するニホンザルより、体毛及び皮ふを採取し、主として形態学的側面から、その地域差について明らかにすることを試みた。

研究は継続中であるが、現在までにわかったことを報告する。

1. 密度

密度は年齢により差があるので、1～7歳までの各年齢層及びそれ以上の8段階に分け比較をおこなった。その結果、密度はいかなる年齢層においても、宮島<波勝崎<下北であった。

2. 長さ

アダルトのメスの体毛でその長さを比較してみると、同一地域でも個体差はあるものの、宮島の一頭を除き、宮島<波勝崎<下北の順にな

った。

3. 毛小皮

いずれの地域の体毛も、毛小皮のパターンはimbricate groupの波型であり、地域差を認めるには至っていない。

4. ずい質

基本的には、どの地域の体毛も一本のはしご状(uniserial ladder)であった。ところが、その発達の場合には差があり、他の2地域のもので認められた、はしご状構造が高度に圧縮され一本の太い線にもみえるずい質を持った毛が認められない等、下北のものが一番劣っていた。

ニホンザル白血球型抗原(JMLA)からみたニホンザルの地域変異に関する研究

野口淳夫・古川敏紀・後藤裕子(筑波大・基礎医学系)・羽柴克子(日本微生物資源研)

細胞表面抗原には種内で遺伝的変異性を示す同種抗原と変異性は示さないが臓器や細胞種の分布に特異性を示すグループが存在する。後者の例として単クローン抗体によって同定されるヒトTリンパ球サブセットのマーカー抗原エピトープがある。本年度はOKTシリーズの単クローン抗体を用いニホンザルの各群のTリンパ球サブセット抗原保有細胞頻度の地理的変異の有無を検討した。これまで解析した長瀬、波勝崎の二群に関しては、OKT4、9、M₁およびIa₁抗原保有細胞頻度に有意な差が見られた。これらのうち最も地理的変異の大きなものはOKT4(ヒトhelper Tリンパ球抗原)の頻度で長瀬群では $34 \pm 5\%$ 、波勝崎群は $14 \pm 2\%$ であった。また予備的データであるが調査した下北群3個体のうち2個体はOKT4抗原0%であった。これらはTリンパ球サブセット抗原の分布に地理的差異が存在する事を明確に示しているが、これが偶発的であるのか地理的に一定の傾向を示すのかについては現在解析をつづけている。次に調査した二群のOKT8(Suppressor T)、OKT11(Eロゼット陽性)の頻度は、長瀬群で 4 ± 1 、 $23 \pm 6\%$ 、波勝崎群で 7 ± 2 、 $30 \pm 3\%$ であったが、これは従来の報告による 43 ± 6 、 $77 \pm 2\%$ と比較すると異常に低い。

これまでの報告はLeuシリーズを用いたもので